

麻生路郎★主宰

川 柳 雅 徳



No.  
248

Penso flugas trans la land-limon



# 續川柳講座

(9)

麻生路郎

## 方言を用ひた句

方言を駆使して句に味やふくらみを持たすと云ふことは、外語や外来語を用ひて、内容をより適切化したり、強調したりするのと同等變らないのであります。句の構成上、方言を用ひた、めに、一段と光彩を放つ場合があります。

しかしながら、方言は文字そのものが示すやうに地方語なのでありますから、方言の持つ厳密な内容を受受し得ない人達にとつては興味索然たる句になつたり、句意が全然不明瞭となつたりする危険を多分に把持してゐるのであります。でありますから方言でなかつたならばどうしても句が生きないといふ特定の場合をのぞいては標準語に據るべきであります。

詭した語であります。しかも多年洗練されて来た語であるため、小川の石が流れくつて圓る味を持つやうに、いゝ意味の方言もあるのでありますから、巧みにこれを使用すれば、筆舌であらはずこの出来来ない味のある句となる場合もあるのであります。方言句の難は弘く句意が通じないといふ點にあるのであります。でありますから方言句は無闇につくるべきではありません。

だいいよおまへんと藝者睦を拭き (五葉)  
 ホートラップ組に迷らなるうち、ぼん (没食子)  
 春團治きつぱりわやになりにけり (水車)  
 ワテが通りまつせといふ歩きぶり (栗)  
 速いかな消えてしまふと火事見舞 (豆秋)

方言の中には、人前で口にし得ないやうなものも多数にあるのでありますから、そうした方言は句の構成上、いかに適切な表現とならうとも避けるべきであります。しかし方言の多くは、その語源が古語の遺物であつたり、その轉

例を京阪地方の句にとりました。「だいいよおまへん」の句のだいいよおまへんへんはありませんと云ふ意で、詰まり句の表では、大したことでありませんと、御心配には及びませんと、いふ譯ではあります。そういふものゝ、決して心からの、それではなくて、大變なことをして呉れたといふ意味が仄かに感じられるのであります。藝者の衣裳は營業用で高い金がかつてゐるのでありますから、何れは汚れるにしても、膝へ酒のしみが出来てはたちまち商賣に差支えるから、内心だいいよおまへんことはないのであります。そこを方言によつて巧みにごらえた句なのであります。

「ホートラップ組に」の句の、うちのぼんのうちは自家の意、ぼんは息子の愛稱であり、敬稱であります。人によつてはぼんぼんと重ね云ひます。大たい小さな子どもに對しての呼び方ですが、相當大きく、嫁が出来てもぼんと呼んたりしてゐる向きもありま

ごりがんであるとあいつは持つてゐる (路生)  
 早う云ひなはれと女將耳を貸し (同)  
 あなたなんだいあんたなんやの軒並び (喜山)  
 おへん事おへんと仲居腹を立て (三雨子)  
 姐さんの染直しとす悪びれず (路生)



## 郷土作家のほかに

色紙が形見

吉田水車

「川柳雜誌」にかほる在りとして異彩を放つた作家であつた。私の識つたのは私が川雉の同人に入つた時からである。

昭和十年に大阪をはなれて名古屋へ来た私へよく下さつた便りにはキツト美しい繪が書かれてあつた。十八年から滿洲へ轉動して居た三年間に極彩色入りの便りがどれ丈荒涼な生活を樂しませてくれた事か。殊に今でも恐縮して居る事はもう大分以前に信州へ行つた時に求めた山家色紙とか言ふ手すきの色紙九枚を土産のつもりで贈つたところごう思はれたのか、その色紙全部へ繪と句を刻明にかいて送り返された。折角の事だつたしよき記念にもなると思ひ厚顔にもそのまゝいたゞいたが計りずも今となつては全くの記念となつてしまつた。芝居は自分で書き割を作る程好きだつた。一見ボンチらしい風ぼうではあるがその句や「川雉」に寄せられた短文、街に

男女両性に作用する  
**プレホルモン**  
 塩野義薬 皮下注射・錠劑

住めば」には流石に柳入らしいするごい觀察眼を持つて居られた。かほるさん、おまきにとも言はず逝き  
 ようように便りをきけば君や亡し  
 性格も趣味も鹿の子の君なりし  
 かほるさん繪筆をすて、何處へ行た  
 暗棘の廻りは舞台上に聲もなし

大阪辯て顔負け  
 市場没食子  
 口下手な僕は句會へいつても、余程心安い人でないと、先輩でも知人でも自分から話しかけてゆかない。然し先方から話しかけられるとそりや受答はする。但し一ぱい機嫌の時はいり過ぎる。僕の口

す。目下の者が云へば敬稱であり、目上のものが云へば愛稱となる譯です。

「春團治」の句の中に、さつぱりわやといふ言葉は全然駄目といふ意で、なんか失敗した時に、さつぱりわややと落語家春團治が口癖に云つたものであります。ここで春團治が死んだ時に、この作者は、さつぱりわやになりけりといふ句にまごめたのであります。この方言の使ひ方はなかなか巧みであります。

「ワテが通りまつせ」の句の中のワテはわたしの轉訛であり、通りまつせは通りますよの意であります。それほど美しくもないのに、うぬぼれてゐるさまが、ワテが通りまつせで強調されてゐるのであります。

「速よいかな」の速よは、ハヨと訓みます。いかなけりかねばの意であります。詰まり早く行かねばと云ふ意味であります。消えた方がい、管の火事でありながら、早く行かねば消えてしまふと云ふところの矛盾を面白く生かした句であります。

「八ツキ兒のくせに」の句のゴンタに成り居つては皮肉な云ひあらはし方であります。八ヶ月で生れた兒だから、小さくて弱々しい兒だつ

たが、いつのまにかいたづらつ兒になつたわいと、親愛の意味が反語となつて表現されて居るのであります。ゴンタはやんちゃやとも云ひまして、いたづらつ兒の意であります。

「うだうだ云ひなはん」の句の、うだうだは兎や角の複雑性を持つた言葉、云ひなはんは云ひなざるなど云ふ意であります。何んとか彼んとか云ひながらも、取るものだけはキツチリ取る如才のない人間を詠んだ皮肉味たつぷりの句であります。

「べんちやらへ」の句のべんちやらといふ語は阿諛、詰りおもねりへつらふの意であります。いくらべんちやらを云つても、且那の方では、そんなべんちやらは既に聞き飽きてゐるので、素知らぬ顔で悠々と胸をはだけて風を入れてゐるのであります。人物が眼に見えるではありませんか。

「ごりがんであると」の句のごりがんの語は横車を押す意の複雑性を持つた言葉であります。明治時代に言葉で来た大阪人でなければ理解しかねる言葉で、今の若い人達には通じない方言であります。持つてゐるは金持ちであるといふ意味です。

「早う云ひなはれ」の句は女將が、何も云ひ悪いことはない、あの妓のこぞだつしやる、早う云ひなはれと耳を持つ

つて来た時の一つの言葉で情景がすつかり描き出されてゐるのであります。

「あなたなんだい」の句のあなたなんだいは東京語、あなたなんだいは大阪語であります。サラリーマン長屋の情景をこの關東關西の若夫婦の代表語で、あますところなく描出したところに句の面白さがあるのであります。

「おへんことおへん」の句のおへんは無いと言ふ意で、つまり、「有りません」と云つたら有りません」といふ意味なのであります。これは京都の方言であります。腹を立てても京都の言葉はなんとなく優しく響くのが特徴であります。

「姐さんの」の句の中にある染直しですの、すも京都の方言で、ですの轉訛したものであります。若い藝妓や、舞妓などが巧みに云ひあらはされてゐるのも、ですの語の持つ力だと思ひます。

最後に、方言句を一瞥いたしますと、その殆んどが、作者の社會観であり、特定人の用ひる方言を藉りて情景を髣髴させ句の構成に役立たせてゐることに構づくのであります。そのと巧みな方言句を詠むために作家自身が方言の中に浸つてゐる人であることが條件となるであります。それほど方言は微妙な言葉の

下手は焦げつきの大阪辯が原因であつて軍隊生活中でも嬌らなかつて情けない苦勞をしたものである。段々と歳をとるに連れて大分矯正されて来たが、それでも知らずく大阪辯を使用してゐる事に氣づく。玉造支部が華やかな頃一夕ビール機嫌で出席した。何んの氣なしに座つたらお隣にかほるさんが居られたので「暑いですなあア」と挨拶したら鷓鴣がへしに「そをだんな様をまんなア」と元氣の良い聲で返答されてその大阪辯の音調のとれたりにハツトビツクリさせられ僕より上の大阪辯があるわいと未だに氣憶に残つてゐる。

### かほる君と僕

岩崎 柳路

かほる君と柳友として交際を始めたのは大正九年正月の十五日、大阪日々新聞主催日々柳壇の新年川柳大會の時からである。場所は本町橋東詰の元大阪商品陳列所の大廣間で、路郎先生とも其の會で初対面の挨拶をした譯だ。それが私の最初の川柳會への出席で、丁度隣りに座して居た優き男？から話しかけられ、初心者同志の意氣が投合し今後會へ一語に出

伊賀・伊勢方面へは のりば 上 六  
河内・大和方面へは のりば アベノ橋

## 近畿日本鐵道

掛ける約束をしたのが、かほる君だつた。其の日以來通信し合ひ各句會へも同道した。路郎先生選の日々柳壇への投句も共に熱中して来たが、大正十二年の關東大震災直後、「川柳雜誌」が創刊せられてから間もなく、私は上京したのでかほる君とも會へなくなつたのである。其後の私は昭和四年に渡滿、七年の春に歸省した時、川柳雜誌社主催で私夫妻の歡迎會が第一、閉會後市地の某料亭で同人一黨よりの宴席に招かれ、かほる君とも久しぶりで語り合つたが其の時のかほる君は以前より余程酒豪家になつたと思わされた。呑めば十八番の聲色が出て朗か過ぎた君であつた。



奈良縣 上 田 翠 光

暇つぶしとは殺生な蠅たゞき  
もう歸り來ます頃なり水打たう  
人情を呪ひ螢が死んでつた  
園はれの暇が詭を習はせる  
念佛もいゝなと思ふ霧の朝  
願以此功德で居眠のけりがつき

鳥取市 大 西 八 步

京育ち九文の足へ花が散り  
露ふくむ風情もなくて造花なり  
初胡瓜のながみ淋しく旅にゐる  
氣の向かぬ名刺を渡す日もありて  
白靴のしよげて戻る梅雨の旅  
轉向へ着物がみんな派手すぎて  
同權の足も外輪になつてくる  
竹槍が役立たなかつた幸福よ

詩人好酒

大阪府 市場 没 食 子

わが影もわすれてうれし酒日記  
麻雀の連れと言ふのも闇屋にて  
暫定給なる煙幕でぼかさされる  
實のどこ闇に命を支へられ  
仕事つゝかす闇の手先として動き

妻の愚痴反抗もせず蚊張に入る  
買出しの妻に従ふ田舎驛  
泣かされてゐた頃がよし妻の身に

名古屋 吉 田 水 車

ライターがあるばかりの煙草にて  
百圓のタオルを提げて風呂へ行き  
梅雨晴れ間棒高跳に似て干され

近隣のバイオリンに惱まざる(二)

バイオリンえらい所へ越して來た  
ジムバリストも斯くやありしとおもへも  
捨てられたひとが戀しうなる日あり  
溜息の様に炭火が消えてゆき  
舞扇へ男だてらの帯をしめ  
胡瓜きざんで一人暮しの夜の膳

大阪市 竹 内 潮 花

女工員に誘ひ出された花の宴  
借りる氣へ貯金の話おうすが出  
お手本になりきつて居る共白髪  
借りのない事も淋しき父にして  
器に做ふ水ともならば生き安し

鳥取市 中 島 鐵 洲

農繁期醫者は齒醫者へ通つてゐる  
青春の襟襟章の數をつけ  
同權の見本女の外科醫ゐる  
セーラー服今日は洋裁通ひです  
留守番の配給物へ二度も出る

奈良縣 尾 崎 方 正

横流しすました顔で店に出る  
診察着きたないものと知るや君  
細いですねと醫者の眼鏡は嗤ふやう  
威張る鯁ふくれる河豚を人に見る  
しなびたるお乳で結婚相談所

時千鳥足のかほる君が大きな音を  
立て階段の何段目からか轉げ落ち  
尻を打ち大騒ぎを演じたが五段目  
や五段目やと誰だか茶化したので  
大笑になつた。

其れ以來私は歸省しなかつたが  
昨年四月に引揚者として祖國へ  
歸還、かほる君の計報も路郎先生  
から聞かされて驚いた譯である。  
同君は畫が好きで何時も通信には  
かほる君獨特の優しい畫を書いて  
送つて呉れた張家口に殘して來た  
色紙の中に左の三葉がある。

大阪は饒れかけてもよいところ  
こないだの禮を云ふてる島の内  
花電車牛が引いたら動きそう  
噫々「川柳雜誌」創刊以來の柳  
友高橋かほる君よ。

### その影

尾 緑之助

思ひ出すと十五年ばかり昔、初  
めて大阪の句會に出た折。たしか  
大市の二階で歓迎小宴の待遇をう  
けた、ことがあつたが、その席上  
かほるさんは黄色い聲でうれしそ  
うに唄い乍ら何んだか踊られた姿  
を覚えてゐる。

又、「川柳雜誌」で時々記事に  
なり、寫眞版に載るかほるさんの  
姿、大阪辯の女形のような人、一  
連の影像は今にも實在の顔となつ  
て現れそうである。別に直接の  
交際はなかつたが「川雜」の上で  
は二十數年になる。まぼろしがは  
つきりするの無理はない。

まぼろしに出てかほるさん  
ごに居る

清談・商談

お待合せに

## 喫茶みどり

みどりの商談  
運が向いて來る

上六交又點西北角

七人きようだいの  
おとんぼ

福田 山雨樓

▼かほる兄と自分とは同じ歳であ  
つたが、性格はまるつきり違ふ。  
かほる兄は洋食をはじめ、汽笛や  
鐵砲の音が嫌い、暗い寂しいこと  
も虫が好かなかつた。僕の堅苦し  
い性格は兄に煙がられたことゝ苦  
笑される。

▼路郎先生はかほる兄の特異な作  
風と性情とを常に支持されてゐ  
た。「街に住めば」など先生の無  
言の聲援があつたればこそ、あれ  
だけ續いて錦上添花を添えたのだ。  
先生はかほる兄の存在を長い目で  
見守つてゐられたのだ。それがほ  
んとうにかほる兄を生かす道であ  
つたのだつた。

▼しかし欲を云えば兄がもう少し  
積極的に先生に接觸し先生の情熱  
に應えてゐたなら、兄の輪廓は一  
段と大きくなつてゐたであらうし  
作品も更に倍加してゐたであらう  
う。これは愚痴になつたが、先生  
を敬遠し乍ら先生に愛された兄の  
飄々乎とした風事は永久に懐か

大阪府 西 尾 葉

俺の代俺の代を信じて養子老け  
身の失敗えらい源助やですみ  
闇の手と許り指輪を三つはめ

大牟田市 高田 抱 逸

七・五前夜の酔を傷で知り

某勢協不買同盟に入る

闇商の餌になるなど立上り  
遅配からやつと浮べば老母病み

借銭の嵩が自慢の暮向き

兵庫縣 徳 永 雅 美

乾からびた笑へソツト眼を外らし  
経歴が良すぎ掃除夫にもなれず  
靴音も高く就職 第一歩

墓石にあらず門柱焼 残り  
鍋底をがりくいわたるとこへ行き

大阪市 木 下 幽 王

營團の前にしなびた顔の列  
米の味をば忘れても戀は戀  
服脱げば社長も矢張りやせてゐた

ぢやがいの値段でお布施割出され

出雲市 尼 綠 之 助

遅配にも慣れて、深刻なあわてよう

農村の夏祭—藝能大會所見(二句)

若い愉悅のやくざ踊りかも  
一とどおり描えて樂園の眞似もする

大阪市 水 谷 竹 莊

針箱に眼鏡がほしい妻となり  
闇たばこ買つたつもりで寶くじ  
萬引の哀れ子供のものをとり

通じたと見えてサンキユー言ふてくれ  
料飲追放おかみ横櫛さしてゐる  
押すと字が二つに割れる非常口

下松市 弘 津 柳 慶

女事務の居る課に花が活けてあり  
雨降れば降つたで引揚者の悲哀  
だんだんに俺に似て来る子が怖し

一銭が落ちてた驛の待合所  
どん底へ来てしみじみと掌を眺め  
旅へ出てつれづれらしく散髪し

大阪市 稻 葉 鳩 花

貸本へする落書を父叱り  
白靴の底もやぶれて働く身  
たいくつな身は大川の橋へ来て

まだ若い戀を見てゐる月見草  
水の輪をのこしてメダカ逃げてゆき

山口縣 岡 村 路 三

立讀みの貸本今日は棚になし  
酔ざめて白髪二三本妻に見る

横濱市 福 田 山 雨 樓

食ひのばしに田舎へ子供素手で遣る  
らんちゆうの名人水に苦勞する  
焼石に水でトマトも茄子も枯れ

金澤市 安 川 久 留 美

三倍になつても慾は賣惜み  
鐘詰の鐘を鳴らして子の夕べ  
草原の尿は神社もあらばこそ

人生をふとんかぶつて考へた  
よそ様の番號のぞく寶くじ

松山前 田 五 健

次に乗る子が後押の三りん車  
輪たくの早さとなつた背の丸み  
赤ちやんのキツス笑へば又キツス

あの時はあーは云つたがそう行かず  
立腹は第二藝術とか云はれ

さい。

かほる兄を偲ぶ

かほるさん明治の御代の生き  
姿

かほるさん利休の下駄で月参り  
かほるさん手拭持つともう踊り

かほるさん一日おいたかほるさん  
かほるさん一徹らしい管をまき

かほるさん金魚の様に派手に  
生き

かほるさんサイナと昔語りする  
かほるさん女形の姿身について

最後の洋服姿

橋本 綠 雨

戦災のかほるさんと六月三十日  
の朝、阿倍野橋で無事な姿を見か  
けたので寸時話し合つた。阪南町  
へ移つて一家無事である事が知れ  
た。七月七日拙宅の句會へ来て微  
用で同盟通信社に勤めてる事を話  
され、その後船後橋附近で通信社  
から退社の見馴れぬ厚生服で封筒  
の住所番をよけるから樂なものや  
と言葉少くして別れたのが最後だ  
つた。

おゝきに

姫 田 夕 鐘

かほるさんと万よしで一杯やつ  
てゐる時でした。「あて一人でよ  
う遊びに行きまへんね。夕鐘はん、  
どつか連れて行つておくれやす。」  
とせがまれるまゝに、あるお茶屋  
へ案内して飲めや踊れの大きわ  
ぎ、「こんなほらかな事おまへ

んさかいあて二、三日歸りまへん  
よつて夕鐘はん先へ歸つておくれ  
やす」「無理言ふんやつたら今度  
から連れて来やしまへんぞ」「か  
んにん——これからさいくたの  
みまつせ」

茶屋を出る時藝妓等に「娘はん、  
わてほらかなことだいすきだん  
ね、ほんまに——おゝきに——」

かほる の 對座吟に

夕 鐘

立竊でいつそおかしき三枚目  
三枚目口説くしぐさへ叩かれる  
番附の好いところにある三枚目

三枚目舞藝奏明るうして這入り  
チヨボが白湯飲むひまがある三  
枚目

三枚目チヨンチヨロ短刀さし



安産のために

ワザカルシューム錠



兩脇の男へ笑ふ婦人記者 七尾市晶 二  
 壁一重ばかりに儲けたなど想ひ 同  
 未亡人西陽を背追つて来て哀れ 同  
 轉任は食糧事情をまづさぐり 長野縣柳 兒  
 カロリーを談じ夏瘦衰れなり 同  
 晝の蚊帳また覗かれて眠られず 同  
 十四日政府へ貸の台所 大阪市恒 良  
 電車賃よりも賽銭出し惜み 同  
 客席に座してリシタク晝を食ふ 同  
 服を着ましたと内輪に歩くなり 東京都汐 風  
 見合から戻つてポツリ口をきき 同  
 家の廣さが寄附帳を持ち込まれ 同  
 父の腫はどおちブローカーしも食ひ 義風子改め 石川縣義 風  
 もうかるぜもうかりませんによりり 同  
 死にたいといふ馬鹿なれば我娘なり 同  
 七月旋風何處吹く風と西瓜切る 西宮市登詩夫 夫  
 半切りのピースをつめた勤めやり 同  
 同じもの着たら人形と云はれます 同  
 まだ泳ぎたい子へ母の聲がする 岡山縣北 星  
 配給の酒は一人で飲むと決め 同  
 押されてもまれてゆられて驛に着き 同  
 百倍かそうか成程やすいのか 大阪市長 光  
 同権になつて妹よくふくれ 同  
 市の配給揭示板が我家の向ひに建つ 同  
 産月の腹で讀んでる揭示板 同  
 こればちのオチで吏員にはねらる 下松市白 星  
 缺配に口紅ばかり濃くなり 同  
 三人の子を持つ女給とは見えす 同  
 婆さんがアツパッパ着るむし 大阪市葉菜子 子  
 食糧危機小包米で足るつもり 同  
 お盆やと西瓜を下げて父歸り 同  
 美くしい客へ嫉妬が先に立ち 大阪市長 子  
 銀米を食つて欠配なげいて居 同

賣喰ひの家から茶の湯の音を聞き 大阪市長 子  
 死ぬ時がない程にくい口をきき 岐阜市周 峰  
 もう一年茄子を収る氣の説計圖 同  
 決心を強いず話題を變へてやり 京都市瑩 雨  
 繪すだれもつゝて氣兼ね合住ひ 同  
 天皇關西行幸 同  
 あこがれのあまり作法をちと忘れ 大阪市晴 夫  
 戀文のやうに疎開の妻に書き 同  
 寶くじ春の舗道の陽に疲れ 大阪市小雅子 子  
 同権の女の聲に負けてゐる 同  
 洋裁が出来てお嫁に行きそびれ 大阪市惠 風  
 看護婦入學 同  
 初日よりベッドに寝ると書きこへる 同  
 病床日記(二句) 同  
 病室の惱み陽の目を見ぬ間取り 倉 吉悟 志  
 けうもよい天氣病む身を焦立たせ 同  
 西瓜畑昨夜盗られたらしい 跡津山市茂 穂  
 正業のなやみ勤勞所得税 同  
 嫁く姉が名残に呉れた英和辭書 岡山縣火 峯  
 麥秋に隣は無事に復員し 同  
 風呂敷の百圓札はそりや金か 愛媛縣曉 風  
 いやと云ふ代り相談して來ます 同  
 ひるねの母を起す間に地震止み 石川縣魯 木  
 波の繪に涼をとりたり街にすむ 同  
 歎おいて無事な茶となる日曜日 長野縣汗 青  
 一匹になつて金魚は底に住み 同  
 師を訪へば酒精廻らんかと言はれ 石川縣夏 波  
 うらまて出た日の汽車は混んで居る 同  
 弟の戀をのぞいて幸よあれ 大阪市長 朝  
 もみくちやを避けて車外に下り 同  
 取締る役が氣持を老けさせる 同  
 遠乗りも暫し佇む虫の聲 吳 市綠 舟  
 名門に生まれたかつた誕生日 大阪市長 芳

### なんばきび

西澤 黄鳥

停電の中に向ひ合つて老夫婦、  
 「こんなに遅配がついてたんで  
 は、おちいさんやつて行けへんな」  
 「そやなあ」  
 「おちいさん、コロリと死んでお  
 くれやす」  
 「そやなあ」  
 「わたし一人だと、ごないでもい  
 けるからたのんまつさア」  
 「たのまれてもすぐ死れるもんぢ  
 やなし」  
 「そう言はんとたのんまつさ」  
 「そうせかせか言いないな」  
 電燈がバツと點いたので、二人  
 とも狼狽してワハハ、と笑つた

米壽まで生きるつもりなんば  
 きび 黄鳥

### 金澤通信

支部幹事 西本 安路

▼二四六號致着。訪ねて來た人に  
 も好評です。直ちに買れまし  
 た。▼先生の御病氣よくなられた  
 とか、お喜び申上ます▼今度川柳  
 文化協會で川柳展を大丸でやりま  
 す。▼又連夜句會を料飲追放の私

▼紅の花さんは黙々のうちの努力  
 家。▼美瓜露さんは鋭敏な頭で甘  
 茶クラブをアマチュアから友人へ  
 移動されつゝあります。▼登良久  
 さんはトラック配車に四苦八苦、  
 所々に投句しておられます。

結核  
 新治療期  
 ネオハツモン  
 コメット  
 黒田製薬株式会社

の家で九十一日の三日間やりま  
 す。北陸もなかく盛んです。▼  
 久留美さんは此頃一寸おいでにな  
 りませぬ。▼鬼水さんは相變らず  
 働き蜂、川柳展に忙しい。▼白林  
 さんは今度から會報程度の柳誌を  
 出して事故のないやうに運轉され  
 ます。冬青さんは足の悪いのをい  
 とはず句會に熱心に出席されます

にきびとり  
 美顔水  
 美谷天



# 古川柳の立場

から

山路 閑古

〔下〕

自分たちが、古川柳をつゝいてゐるのは、古川柳そのものゝ爲でもあるが、一面又新川柳方面にも、何かしら寄興するところありたいと思つてゐるのである。たゞ／＼しいけれども、自分でも作句を試みて居り、川柳家の作品も出来るだけ廣く觀察して、充分に理解を持ちたいと思つてゐる。

さて、季題も切字も持たない、獨立十七字の詩が、果してそれで詩歌としての、面目と價值を保ち得るであらうか。或人は川柳は詩歌でないと思つてゐる。これは一面の眞理であつて、大部分の作品は、詩歌でも何でもないやうである。俳句と違つて、何しろ摺みどころがない。自由であるだけに却つて、イデオロギーを持ち悪い。無理もないことである。

そんなことで、とかく文藝から締め出しを喰ひさうになる。さういふいきさつは萬々御承知だらうと思ふ。

自分は思ふのに、川柳はこれ程にも民衆の支持を受けて居り、むしろ俳句より川柳の方に一般の人氣があるのだから、その間に何か魅力あるものがあるに違ひないと考へるのである。何とかして支持したい。床屋俳諧や天狗附などと同列に置かないで、民衆詩として独自の地位を得しめたい。かういふ考へでいつもち出して來るのが古川柳である。古川柳なら一も二もなく承認して貰へる。立派な藝術作品だと誰も云ふ。麻生氏に限らず、誰の柳論を見ても、古川柳の二つや三つを出して、人の注意を惹き、それから所説を展開すると云ふ行き方をしてゐる。これは、古川柳が一般藝術界に或る地位を占めてゐることの證據であつて、大いに考へなければならんことだと思ふ。

十七字の自由詩だから、誰でも勝手なことが云へる。従つて作品の数は多く、屑も多い譯である。これは昔も今も變りはないと思ふ。しかしそ

の數多いものゝ中には、必ず光つたものがある譯であり、それを採り出すことが困難だといふのみである。

昔の選者は、その選擇にかゝり切りで、自作を發表してゐる餘裕がなかつたらしい。それ位一所懸命に選句をすれば、必ず純度の高いものが見出される。古川柳の實例について、尙委しくお話ししよう。

季題も切字も持たないで、川柳發生時代には正直のところなか／＼句は作れなかつた。やはり從來のやうに句にまとめる爲には、前句の力を借りなければならなかつたのである。先づそれらの夥しい作品の中から、第一次選を行つて駄句を振ひ落し、入選句を「万句合」に收容した。次で第二次選を行ひ、「万句合」の中から、獨立短句、つまり川柳として成功してゐるもののみを選び出して「柳多留」に收めた。この間、嚴選に嚴選を重ね、恰も砂中より金を採り出すやうな、えげつない精練を行つてゐる。

その具体例として、寶曆七年の作句界の有様を表にしてお目に掛ける。寶曆七年を抽き出したのは、これが一番最初の「万句合」(川柳評)で、まだ投句數が少く、計算に便利だからである。比率は何時

の年も大体變らないやうであるから、この年のもので間に合ふと思ふ。因みにこの材料は水木眞弓氏の調査の結果を自分が計算して表にしたもの、かうして失はれ掛けたものを採り出す學者の仕事も、昔の選者のそれに劣らず厄介なものであらうと察せられる

實暦七年の万句合の番數

投句	第一	第二
總高	次選	次選
(1)	三〇七	三三
(2)	五九六	三三
(3)	八九	三三
(4)	二六二	三三
(5)	一六四	三三
(6)	一八五	三三
(7)	二八三	三三
(8)	二六九	三三
(9)	二六六	三三
(10)	二五五	三三
(11)	二六三	三三
合計	二五二	三三

右の表で御覽のやうに、凡そ一萬七千句の中から、五十句を獨立單句として、即ち川柳として残してゐるのである。ともかくも鑑賞に堪へるものとして、吳陵軒はこれを「柳多留」に登録したのであつた。成る程、この位嚴選をすれば、一かどの藝術品にもなるであらう。唯不思議に思はれることは、無数の作者が、これだけの犠牲を拂つて、よく黙つてゐられたと云ふことである。否々、益々勇氣百倍して、投句數は年々鰻上りに増加し、而も投句一句について、可成り割高な入花料をさへ拂つてゐるのである。

作家のこれだけの熱意に對しても、藝術品はおのづから形作られなければならぬ。よしんば、かうした嚴選の事情は知られなくても、かうなれば作品がものを云ふ。川柳を文藝から締め出そうとする一知半解の連中さへ、まてよ、これは乃公たちの認識不足だつたかといふ感じを起すのである。

それから先きのことは、諸君の方で考慮をめぐらされることで、自分はあまり差し出したことは云ふまい。果してさういふ嚴選主義が、現在の雜誌で行はれ得るかどうか。それは誰にも判る生々しい現實問題である。

に 覚 醒 頭 腦 (公定書) プロパマン (錠)

**ゼドリン**

☆ 睡 氣 を 防 止 し ☆ 頭 明 を 促 す

いのちある句を創れ



投稿清規 用紙は原稿用紙 文字を正確に開催月日及場所記入 締切は月廿五日 投稿先本社宛

かほるを偲ぶ會

八月三日午後一時から、生根神社で郷土作家「かほるを偲ぶ會」を開催。故人と親交のあつた珍類が續々参會。そこへ万よし氏に伴はれて未亡人が出席されたので異色のある句會となつた。

披露に先立ち、出席者の誰彼れが思ひ出を語るこゝとなり、第一に道田葉平氏が立つ。「葉平さん、あんた商賣なにしてはなんれ」「洗濯屋ですれん」「うちへ一寸廻つておくらなはれ」「私は個別的ではないので廻らぬかも知れまへんで」といふことで私の商賣は、とう／＼かほるさんには謎であつたが、かほるさんの死後三年、私の商賣をかほるさんに御報告いたしますと、煙りで汚れた大阪の空気を洗濯する職業であることに就て話された。次いで川柳雜誌社の句會の餘興「赤城嵐」にその昔、演技を共にした日野華水氏が、會社から青島へ出かけ、そこで川柳研究をやるのに、文獻がないので、かほる氏に手紙を出したら早速「川柳雜誌」を送つてくれた、と、かほる氏は手まめな方で、昨日逢うて、今日もう手紙を寄越されたと云ふこと、芝居好きで宅に小さな舞臺を作つて始終やつてゐられたこと、國定忠治をやつた時に、女形にしてくれとせがまれたので膏家の娘お花をでつちあげてやつと芝居にまつたこと、樂屋見舞なかつたら淋しいおまつせ」と云つて自分から樂屋見舞をふるまつた等々を話された岩本素人氏は私は酒呑だ、だが故人も酒好きだつたが強

くはなかつた。生活なども個性のハッキリしたかほる式生活で結婚當時新妻に桃割を結はしてゐた事もあつた。人の批判をしたことのない人で、これによつても故人の人格が偲ばれるといふやうなことを語つて故人を追慕された。松盛琴人氏はかほる君が特色のある作家であつたこと、芝居については熱狂的であつたこと、女形に興味を持つてゐられたこと、いつも和服でやわらかい線を充分に出されてゐたこと、大阪は標かはれなれぬ人であること、大阪の如く大阪はなれられぬ人であつた。戦災後、洋服姿のかほるさんに會つたが特徴があるの直ぐ判つて呼びとめたが、これが洋服の着はじめの着おさめだつたとはいふことと結ばれた。次は道頓堀川一つ隔て、住んでゐた庄万よし氏が、「坊主持親切なのは締直し」の句にかほる氏のよき性格がにじみ出てゐると云つて選者が探つたことがあるのを覚えてゐるといふことから話しはじめ、二々昔も前のことであるが松江吟行の時のこと、ごうせ出雲節と酒で攻められるであらうが、酒にはひげはとらぬ我々も出雲節では一步譲られねばなるまい、出雲節に對抗するため淨るりを持つて行つた。車中での練習も、かほる氏は眞剣、實に魅力のあるお軽だつたので好評を博したのである。すべて夢と遊びの實現のためには全力を傾倒した人である。かほるさんは永久に大阪に生きる人であると結ばれた。最後に、路郎主幹が、故人の略歴や逸話に就て語らる故人に對して感銘を深くさせられたが紙数が盡きたので省略は作造であつたが嫁つて殆んど、かほるの雅號で押し通された。昭和廿八年八月四日終戦直前に病歿されたのである。

(一幹事)

- 出席者 路郎・勢三・梅里・豆秋・白柳子・葉平・鳩花・千舟・潮花・幽王・茂・牛文鏡・十空子・華水・万よし。

賀代・没食子・翠光・梅里・喜代志・素人・琴人・香林・ほまれ・寒浪・醉月・竹莊・史葉・武夫

兼題「大阪辯の句」 麻生路郎選

わるさして困りまんネと嬉しう 琴人  
ソロバンをはじき乍らのさうだ 登美坊  
自轉車でしんたくさんへ急ぐ用 没食子  
なんぼでも鬨りなげれと涙ぐみ 千舟  
よう云はんわお米が二百五十圓 葉平  
同情の顔で營團まだだんれん 勢三  
あつまんな暑つおまん帯をもち 香林  
いとよんのお供補助すにかしこ 白柳子  
あんじょう言ふてんや金借つて去 没食子  
おへはんのお供だんやと文樂座 没食子  
外れ球が轉々おつさんほつてんか 勢三  
舞ひ扇たゝんで一杯もらひまほ 潮花  
火のついた様におりまつせおら 翠光  
家とへばもつとあつちで聞きなれ 潮花  
べちやんご押と一手の店を出し 万よし  
親に向つてホツチツツ、カモチチ 豆秋  
電話口きつとだつせと念を入れ 喜代志  
引揚にぞつからでつかと屋臺店 史葉  
もつこれ仕舞だつせと閑屋云ひ 十空子  
すかんたら思へんと思へ且那なり 茂  
統制とテレコになにもかも騰り 豆秋  
えらい事出来ましてん泣きもせす 葉光  
ちがふ／＼をちやがさ汗を拭き 同  
啄木に泣く涙ありいげす 翠光  
禿げたのがぼんと呼はれてより返り 没食子  
うちももうき三十のツカガール 茂  
いつまでもてで通せめ椅子につき 没食子  
だしぬけに來たら御馳走おまん 竹莊

兼題「聲色」 市湯没食子選

聲色で故人を偲ぶ懐かしさ 葉光  
枝折戸を聲色で來る好きなる 香林  
聲色の課長が出たり電話口 史葉  
聲色へ東山から月が出る 豆秋  
紙芝居もう聲色に馴れ切つて 潮花  
亡き父の聲色も出る三回忌 千舟  
聲色の顔の粗末な成駒屋 梅里  
襲名披露その聲色も父に似て 竹莊

七色の聲で雲月名を博し 梅里  
聲色も終幕近い紙芝居 勢三  
本當の顔で聲色終ひなり 華水  
聲色はあたまのテツべから出し 豆秋  
聲色を煽てに乗せたかくし 梅里  
ゴーンと鳴つて聲色の名調子 寒浪  
芝居好きその聲色も板につき 同  
名調子待つてましたのやじさ 同  
上官をまれてピンタも食ました 幽王  
聲色も遊く名優地味好み 勢三  
母さんの聲色なる叱りよう 茂  
聲色で身すぎ世すぎも戀の果 琴人  
聲色は音痴乍らに甘いもの 万よし  
酔ふと又しがれな戀を演りはめ 梅里  
聲色が女になつた手の動き 華水  
聲色のこゝらで猪の出るところ 没食子

席題「夕立」 武部香林選

すぶぬれになつて蟬としかへなり 翠光  
夕立へ迎ひの傘がもちに成り 潮花  
夕立の立やとビール呑んでる ほまれ  
夕立の後キヤンアー屋ひまになり 千舟  
夕立へ冷たく降ろすパスガール 同  
社務所へも夕立になる風が吹き 十空子  
夕立へ相合傘で送られる 竹莊

阪田膽寫版

大 阪 市 北 區 芝 田 町 五 二  
株式會社 阪田商會  
電話 鳥 一 三 六 九 番







# 六號室

▼日本のリコンストラクションに就ては私等は必ずしも悲観してはゐない。しかし樂觀してゐない。どの世界も遅々としてではあるが確に動いてゐる。日にはさやかに見えれどもと云うが、たしかに日に見えて動いてゐるのだ。が、氣づくとも氣づかぬとの相違だ。「便利でよろじゆおますわ。戦争は済んでもモンベは穿きますわ」と云つてゐた人達も、いつの間にか、モンベ姿から脱却してゐるではないか。▼川柳の世界でも日に月に、再建が急がれてゐる。柳社の、柳誌の、再建が日立つて来た。大會や特種會が各地から報じられてゐる。中でも堅實な、しかも素晴らしい本誌の動きが各地の柳友に大きな示唆を與えてゐる。▼前號での約束を果すため、句報の發表にスペースの多くを割いた。▼いろ／＼な計畫もあるが、今のページ数ではこれ以上の内容は盛れぬ。増ページも考へてゐるが、なるべく値上げ問題に觸れたくないでなやんでゐる。▼いゝものを安く出したい、そこが私等の願ひなのである——(路)

## 窓 口

何でもない事だが、葎乃女史選の兼題「友白髮」は文字の上で「共白髮」とするのがホントウだと思ふが如何? 「共かせぎ」が

「友稼ぎ」でもあるまいから……金澤には「友白髮」といふレッツルの酒銘があつた。中味は何でも御祝ひの時に贈るためにつけた名らしい。森の家が今の夫人とマツマツタ時「友白髮」を二升やつて一升平げた昔あり、その時私の職が酒やの番頭、二十九才だつた。又サケの一件り(金澤・久留美)友白髮が正しいのだが、今は共白髮と両方使つてゐる。お祝ひの時共と友では感じが違ふ。共稼の方は若い夫婦の物質的動きが日に浮ぶが、友白髮は尉と姥の方だ。茶飲み友達の方だ。共白髮は文字に無關心な人が、書き始めたのが慣用されたのであらう。(路)

## 動 靜

▼尼崎の扶桑金屬で扶桑川柳會が路郎主幹指導の下に、七月四日午後四時から開かれた▼濱寺支部會が七月五日と十九日の午後六時半から諏訪森會館で開催され路郎主幹出席▼本社會が七月六日午後一時から生根神社で開催された▼大阪逓信病院會は七月十八日午後二時に開かれた▼千石莊病院會は七月廿六日に開かれた何れも路郎主幹出席▼路郎主幹は八月八日午前九時から十時半まで大阪府主催の文化夏季大學の講師として貝塚市へ出張「川柳と生活」の講述をされた▼同日午後四時からには尼崎市の扶桑川柳會へ▼同十五日は大阪逓信病院會へ▼同二十日と十六日は濱寺支部の會へ路郎主幹が出席された▼伊志田孝三郎氏が「すげ笠」の同人に参加した。それを機會に全國川柳大會が企劃され十一月二日名古屋市の十

洲樓の大廣間で開催されることとなり、路郎主幹も孝三郎氏の招請に應えて腰を上げることになつた。全國の路郎フアンのおびとするところとならう。▼武藤奇智朗氏は海外引揚後、和歌山縣那賀郡北野上村大字別院七四でタワシ・ロープ各種棕櫚製品商を開業された▼大谷五花村氏は近ごろは殆んど東都在住らしい。多くの名譽職も辭め、財産税で身輕になり今は令息の作つてくれた隠居所でサバサバした餘生を樂しんでゐられるそらだが、そこに川柳があることは併せてあらう。▼せんりう昭和の堀口塊人氏は國際新聞に「川柳は呼ぶ」(七月十七日)「こんな川柳」(八月廿一日)を執筆▼藤曲驛長國弘半休氏は宇部鐵道俱樂部文化部長に選任せられた由▼山崎惠一氏は富山市針原中町へ移居。

## 不朽洞會から

▼川柳不朽洞會も洞報を刊行して會の動靜を報じたが、入會を希望する方も殖えた。今後の發展が期待されてゐる。▼主幹のタバコ記事を読まれた洞友前田五健氏も愛煙家の一人「たばこ難神農ほごに喫ひためし」の句を寄せられ、「何やら彼やら喫ひ、鼻やノドを虐待してゐます、近頃櫻の葉を蒸くら餅の味もしてゐます、他の煙草に混じてやると一層の味がありません」とのこと。▼弘洋柳慶氏から八月十日に下松、光、防府の三地合同納涼川柳會を富海で開催するとの通信に接した▼浪玲之介氏は生野區大今里北之町に協和精機株式會社を創立されたが同社の

常務取締役久島一市氏等と共に今後、社内で川柳雜誌社今里支部會を開催されることとなつた發展を祈る▼奥村丹路氏は日曜は家にあつて鶴小屋をひろげてアヒルを同居させたり家庭の父を發揮されてゐるそうである「家にあつて子とこるぶなり憂きはらし」の句情を寄せられた▼高田抱逸氏も三池染料の方で同志五六人と月一回の會を開いてゐられる由▼西田紳樂氏は戦災跡のバラックで、令息の名でピース薬局を開かれた▼終戦直前の八月四日に亡くなつた郷土作家高橋かほる君のために、八月三日に「かほるを偲ぶ句會」を催し、それ等の句報や故人と親交の深かつた柳友の思ひ出の記事を掲げて故人を悼むこととした。

## 社 告

▼左記へ支部を新設した。附近の柳友は協力された。

**血圧降下に**  
**アーグレミン** 錠剤注射  
血管アウトホルモンとアミン塩類  
山之内製薬

**川柳雜誌** 第二卷 第四號  
B列5號 毎月一回一日發行  
一册 金五圓 (送料七拾錢)  
半ケ年概算 金四〇圓  
一ケ年概算 金八〇圓  
昭和廿二年八月廿五日印刷  
昭和廿二年九月一日發行  
大阪府住吉區萬代四丁目二五番地  
編輯兼發行所 麻生 幸二郎  
大阪府住吉區萬代四丁目二五番地  
發行所 **川柳雜誌社**  
電話 大阪 七五〇五〇

**品質優良**  
ペン先・針ペン・セムクリップ  
**立川ペン先製作所**  
上野市

久賀支部(山口縣久賀町)  
幹事 岡村路三氏  
今里支部  
(大阪府大今里北之町)  
精機株式會社内)  
幹事 浪玲之介氏  
篠山支部  
(兵庫縣多紀郡篠山町)  
幹事 小西無鬼氏